89 豊川キャンパスと豊川海軍工廠

名大には、名古屋市の東山・鶴舞・大幸のほかに豊川にもキャンパスがあります。現在は１ヵ所ですが、かつては２つの「豊川キャンパス」がありました。

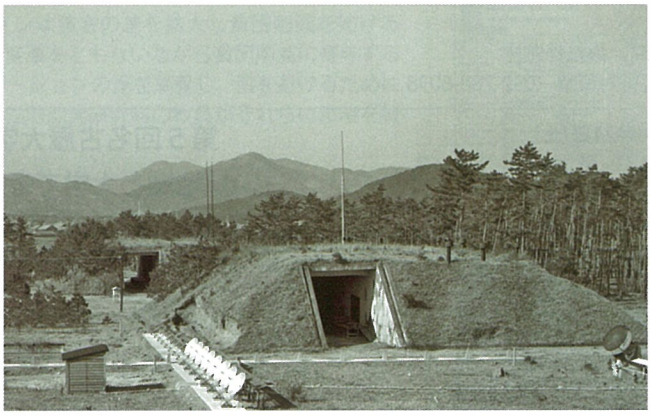
１つは、豊川海軍工廠の工員養成所跡を利用し、岡崎高等師範学校および教養部が置かれた豊川分校、その後は農学部附属農場となった地区です（現・豊川工業高校）。

そしてもう１つが、豊川海軍工廠本体の跡地の一部にあたる、現在の豊川キャンパスです。現在は太陽地球環境研究所豊川分室が置かれていますが、かつては同研究所の前身にあたる空電研究所でした。

終戦後、アメリカ空軍は理工学部の金原淳教授の空電方位測定による雷雲探知研究に注目していました。この研究が太平洋を横断する航空機の安全な飛行に必要だったためです。そこで1947(昭和22)年、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）は、管轄下にあった豊川海軍工廠跡地北西部分を空電研究のために開放しました。こうして1949(昭和24)年、新制名古屋大学の発足と同時に空電研究所が設置されたのです。

1939年に開庁された豊川海軍工廠は、敷地面積約198万３千m^2、最大時で約５万人が働き、東洋一の工廠（軍直属の軍需工場）とも言われていました。それゆえ、終戦直前の1945年８月７日には、B29爆撃機の大編隊による大空襲を受けました。26分間に計3256発もの爆弾が投下されて一夜にして壊滅し、工員と動員中の学徒ら約2500人の命が失われたのです。

現在の豊川キャンパスにあたる区画は、まだ空爆の被害が少なかったといわれています。戦後当初、構内には土で固められた３か所の弾薬庫、兵器、弾薬製造に使われた10数棟の建物が散在していました。空電研究所はこれらの一部を補修して観測室や研究室などに充てましたが、残った建物や土塁はそのままになっており、今でも藪の中には当時の建物などが見られます。



1 2
3 4

1　豊川キャンパスの航空写真。敷地面積は約18万８千m^2である。

2　パラボラを大量設置し始めた頃の豊川キャンパス。中央に写っている土塁で固められた火薬庫は今も見ることができる（太陽地球環境研究所提供）。

3　地図上の船形の敷地が元海軍工廠の敷地。左上の区画が現在の豊川キャンパス。©2009 Google-地図データ ©2009 ZENRIN-

4　キャンパス内にある工廠廃屋の内部。当時のまま残されている。

名古屋大学基金

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。この基金は、平成18年3月に創設され、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業などの充実のために活用されます。ご寄附のお申し込み、お問い合わせは秘書課（基金事務局）あて（電話052-789-4993, 5759、Eメール kikin@post.jimu.nagoya-u.ac.jp）にお願いいたします。

Nagoya University Archives
9 200900 005896